「国際文化住宅都市」
芦屋の一翼を担って

第26代校長　岡　田　　学

芦屋高等学校80周年記念誌に寄せて

芦屋に初めて赴任して感じたことは、桜並木の美しさだった。歩道に散った花びらを、きれいに掃き清められている市民の姿が目にはいった。「国際文化住宅都市」芦屋を、地域の方々が支えている。地域の力の素晴らしさは、桜祭りや秋祭り、地域防災への取組など多くの場で実感した。

阪神淡路大震災の経験を伝え、次なる災害へ備える取組は、顔が見える街づくりとしても意義が大きく、地域との合同避難訓練など芦高生とも様々な交流の場を設けて頂き、芦屋高校に通う生徒はすべて“芦屋市民”であると受け入れていただいたことを今も感謝している。

在任中の取組で一番大きかったものは、「外国人生徒にかかる特別枠選抜」の導入だった。芦屋高校は、従来から外国籍を持つ生徒が多く在籍していた。新しい制度の導入に選ばれたのも、芦屋という環境に支えられての事だったと感じる。先進校の取組の視察、受け入れの仕組みづくりと多くの先生方の努力で、整える事ができた。初めて受け入れた3人の生徒はとても優秀だった。修学旅行で訪れた台湾の高校との交流の場でも大いに活躍をしてくれた。ニュージーランドへの語学研修の再開もあって、生徒の皆さんは世界の中の日本ということを実感し、授業に進学に取り組んでもらえたのではないかと思う。

コロナウィルスによる緊急事態宣言が出され、今は世界が閉じられてはいるが、国際化・情報化の歩みは留まることはない。これからの芦屋高校生、卒業生の皆様が世界で広く活躍されることを願っています。